

東日本大震災の復興に向けて

～ 私たちは3.11を忘れない 支援の輪をつなげよう ～

3月11日14時46分に発生した東日本大震災からはや半年が経過しました。この間、連合三重は3月12日に「連合三重災害対策本部」を立ち上げ、情報提供、救援カンパ活動、ボランティア派遣を行なってきました。被災地は日ごとに明るさを取り戻しつつありますが、復興には長期的な支援が必要です。これからも連合三重は東北の復興に向けて息の長い支援活動を進めていきます。

◆「連合三重災害対策本部」の主な活動

①情報提供

ホームページによる情報提供、土森会長メッセージや機関紙号外を発行しました。

②救援カンパ活動

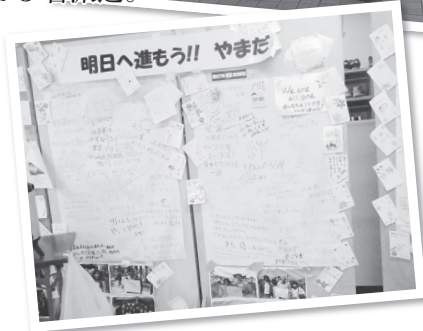
駅頭や街頭、ホームページを通じてカンパ活動を行い、連合本部へ送金しました。
ご協力ありがとうございました。 **5,078,542円**（8月31日集約）

③ボランティア派遣（9月13日現在）※本部要請に基づく産別派遣は除きます。

- ・「連合救援ボランティア」や現地運営スタッフに連合東海ブロック枠で3名派遣。
- ・「みえ発！ボラパック」参加者579名のうち、組合員は70名
(男性61名、女性9名)

④「みえ災害ボランティア支援センター」の活動支援

- ・復旧、復興支援活動のため300,000円を寄付
- ・岩手県山田町への組合員のボランティア参加の呼びかけ
引き続き参加を呼びかけていますので、参加希望の方や興味のある方は、労働組合または連合三重までお問い合わせください。



◆「連合災害対策救援本部」の主な活動

①救援カンパ金

国内外から総額約8億2,000万円（9月12日現在）のカンパ金が寄せられ、義援金は岩手県、福島県、宮城県に各2億円、茨城県、千葉県に各2,000万円を交付、その他連合救済活動費（ボランティア送迎バス代3,500万円）に充てられています。

②連合救援ボランティア活動（9月12日現在）

連合のボランティア隊も社協を通じて岩手県・宮城県・福島県で活動し、連合のボランティア派遣は民間による団体ボランティアとして最大規模の派遣。ボランティア派遣は、第1陣が3月31日にスタートし、9月18日出発の第24陣をもって終了しました。

※延べ人数 33,323名（人数×日数 実派遣者数 5,835名）



みえボラパックの支援活動

東日本大震災復興支援

ボランティア活動 参加者からの声

連合三重からボランティア活動に参加された方々の声が届きましたのでご紹介します。

継続した息の長い活動に向けて支援の輪をつなげていきましょう。



みえボラ第19便 (8月2日～8月3日)

土森 弘和 (連合三重会長)



出発前にボランティア教育を受講し、「みえボラ」の一員として瓦礫撤去に従事。現場では、被災者ニーズにより、自分のできる事をやるだけで精一杯であったが、チームで支えあい安全に終えることができ、被災地での温もりを感じた。日頃は、連合三重の看板を掲げ、その存在をアピールする習性が身についており、「連合三重」という意識が強くあったが「ボランティアの現場ではどうでもいいこと」である。この経験を運動につなげたい。

みえボラ第21便 (8月17日～8月23日)

勝間 裕規 (自動車総連・柳河精機労組)

活動先の岩手県山田町は、海沿いで三重とよく似た漁業が盛んな所ですが、現地に到着した時は震災前の姿を想像することも難しいほど、無残な状態となっていました。復興のために少しでも力になれるよう色々な活動をしたが、復興に向け取り組んでいる山田町の方達と接しているうち、反対に自分が力をもらえたような気がします。

学生から様々な職業の方と一つのチームとなり交流もはかれ、参加して本当に良かったと思っています。

みえボラ第15便 (7月16日～7月21日)

金森 茂樹 (電機連合・パナソニック電工労組四日市支部)



岩手県山田町での実働4日間、汚れた写真の洗浄や配給食糧の仕分け、ガレキ撤去の作業を行いました。全国各地より支援者が来ていましたが、圧倒的人手不足の状況で復興への道のりは果てしなく長いものになると肌で感じました。これから微力ではありますが、『がんばれ東北』に協力していきたいと思いますが、『がんばれ東北』に協力していること、心と体を癒す家と家族があることが当たり前ではなく、感謝しながら毎日を送りたいと思います。

みえボラ第16便 (7月21日～7月26日)

成川 達 (自治労・鈴鹿市職労)

町の海岸付近では、津波によりほとんどの住宅は流され、基礎部分が残っているだけでした。すでに大きな瓦礫は撤去されていましたが、その中でわたしたちは、ガラス片やコンクリート片などの細かい瓦礫を土嚢袋に詰める作業をしました。1日に約8人で作業し、やっと一軒分の瓦礫を片付けることができたというものでした。また、高く積み上げられた多くの瓦礫や車のスクラップを見て、「これをどのように処理するのだろうか?」と思わずにはいらませんでした。

みえボラ第21便 (8月17日～8月23日)

山本 愛 (三教組亀山支部)



震災から4ヶ月。初めて訪れた山田町は更地になったところが多く、復興が進んでいるようでした。重機でガレキを分解したり、木材をチップに変える作業などを目にしたりしました。しかし、ガレキ撤去の作業をしていると掘り起こした土の中から写真や卒業証書など、個人の思い出の物がたくさん出てきて、機械での作業ではなく、人の手による作業が必要な部分が多々あると感じました。山田町の方から「ボランティアありがとう」と声をかけていただく機会がたくさんあり、逆に元気をいただけたボランティア活動でした。

みえボラ第10便 (6月25日～7月2日)

中村 牧男 (JEC連合・日本板硝子NGF労組)



山田町の依頼にあったお宅に作業に出かけたとき、近くである衣料が店舗再開に向けて準備を進めているところがあり、復旧・復興に向け一歩ずつ進んでいるのに感動しました。今回、私の活動は微力ではありますが、みえボラバックにより継続して支援していくことが大切であり、どんどん参加してほしいと思います。

みえボラ第10便 (6月25日～7月2日)

森澤 淳 (私鉄総連・三交労組伊賀支部)

巨大津波の被害を受けた山田町は壊滅状態で、何もかもさらわれて場所によっては本当に集落がここにあったのかと疑ってしまうくらいでした。震災から3ヶ月余り経って、がれきの撤去は徐々に進んでいるものの、まだまだ計り知れない量のがれきが残っています。復興には大変な労力と相当な時間がかかると思いますが、ひとり一人ができることをすることによって、確実に一歩一歩と前に進んでいくものと確信します。

みえボラ第10便 (6月25日～7月2日)

伊藤 弥生 (全電線・住友電装労働組合四日市支部)

今回私は、ボランティアに初参加でしたが、被災地では多くの方々が今もなお日々不安で困難な状況の中、一生懸命前向きに頑張っている姿を実際に見て、聴いて、肌で感じることで、本当に良い経験になりました。普段の仕事では味わえないチームワークでの達成感や充実感を得られ、また現地の方とコミュニケーションをとることにより自分自身が大きく変わることが出来たと感じています。少しでも興味があるなら自分自身の成長の為に行くべき!!とお勧めしたいです。

みえボラ第9便 (6月18日～6月25日)

永井 一成 (電力総連・中電労組)



本格的なボランティアに参加するには初めてなうえ、班長も仰せつかり、不安でいっぱいでした。しかし現地の方からの感謝の言葉や、日に日に強くなるメンバーのチームワークなど確かなやりがいを感じるようになり、非常にいい経験をさせて頂いたと思います。1日も早い復興を心から願うとともに、引き続き支援をしていきたいと考えております。

みえボラ第8便 (6月11日～6月18日)

三橋 光穂 (JF労組・JP労組三重県連協)

今回のボランティアに参加して一番感動したことは、社会全体が被災地を応援していることでした。また、日本全国にボランティアを派遣する企業がたくさんあること、ボランティアとして多くの人たちが汗を流していることでした。私ひとりの力としては微々たるものですが、被災地の方々にとても感謝され、たいへん嬉しく思いました。

私は、「絆」という言葉に熱い想いを感じ、今後もいろいろな形で被災地を応援していく決意です。

みえボラ第8便 (6月11日～6月18日)

奥中 雄二 (基幹労連・ユニバーサル造船労労組)



小学校の校庭で生徒達がリレーをしていて一生懸命腕を振って走る生徒達、そして先生と生徒達が溢ればかりの笑顔を見ながらという光景を見た時は、とても感動しました。今思い感じることは、「子供達の明るい未来へバトンをつなぐ為にも今、元気な我々が頑張る働き、税金等を国に納め少しでも早い時期の復興につなげ、子供達が新たな未来へ走り出せる環境を創ってあげないといけない。」という責任感です。この経験を活かし、「絆」を大切に様々な難局を乗り越えたいと思います。

みえボラ第12便 (7月4日～7月10日)

中山 直明 (運輸労連・全日通労組)



実際に被災地を目にした時、全員が何も言葉が出ず、じっと見ていたのをすごく記憶に残っています。ガレキ撤去などの作業で被災された方のご家族と話することが度々あり、震災時の詳しい状況を聞いた時は複雑な気分でした。しかし、現地スタッフや被災された方が明るく元気な印象的で、みんな辛い状況の中で頑張っている姿に胸を打たれました。テレビなどで見る被災地と現地は全く違い、本当に現地は大変な状況です。貴重な体験をさせて頂き、これから復興に協力していきたいと思っています。

みえボラ第13便 (7月8日～7月14日)

北村登史雄 (国公総連・全農林労働組合野菜茶試分會)

参加を決めてから出発するまでは不安もあったのですが、このボラバックでは大型バスによる運行で安全で快適に現地入りすることができ、安心してボランティアに専念することが出来ました。現地では被災者のお宅の屋内外での瓦礫の撤去を中心に活動しました。今後、状況に応じ、活動内容は変化すると思いますが、復興に向けての闘いは始まったばかりで今後も長期にわたって続くと考えられます。被災者の方との絆を大切にして、このような活動を通じて息の長い支援を行うことが重要だと感じました。

みえボラ第18便 (7月28日～8月3日)

真弓 照美 (連合三重スタッフユニオン・MIEワークス労組)



半年前まであったはずの防波堤や家屋、JR陸中山田駅だったとされる焼け焦げた土地、浸水したままの住宅街の跡、そんな光景を見て自分に何が出来るのだろうかと思ふようになった私。しかし、山田町ボランティアセンターで「明日へ進もう!!やまだ」の張り紙を見て、逆に勇気をもらいました。微力でもみんなが力を合わせて行動すれば必ず前に進めるはず。そう信じて、今後も復興に向けた支援活動を行っていきたく思います。

連合救援ボランティア第12陣 (6月27日～7月3日)

金森美智子 (連合三重 副事務局長)



福島県会津若松の物資センターにて、搬入されてくる支援物資の仕分けや、物資を受け取りにくる被災者の方々の受付や配付作業を行いました。数ヶ月に及ぶホテルや旅館住まいを強いられられている方から、「ありがとう」と声をいただき、地元ボランティアの皆さんから、連合ボランティアが日本各地から支援を続けていることへの感謝の言葉をもらうなど、感動と同時に頭の下がる思いがしました。長期にわたる支援が必要だと思います!!